



文化国家日本



国際交流基金理事長

安藤裕康

あんどう・ひろやす
1970年外務省入省。在米特命全権公使、在ニューヨーク総領事、在イタリア特命全権大使等を務める。本省では、中東アフリカ局長のほか、外務大臣秘書官、内閣総理大臣秘書官、内閣官房副長官補など、政治との接点を数多く経験。2011年10月より現職。

大使として海外に勤務し、強く感じたのは、近年、日本経済への注目度が下がりつつあるのに対し、日本文化への評価は逆に高まっていることである。

その場合の文化とは、芸術や文芸はもちろんだが、もっと広く日本人の生き方や価値観、そしてそれらが築き上げた成果の総称と言っていいだろう。長い歴史と美しい自然に育まれた日

本人の感性、あるいは平和で安全で便利な社会が生み出すものである。日本に旅行して帰ってきた外国人は異口同音に、いかに日本が素晴らしい国であるかを、目を輝かせて力説する。私たち日本人はそのことにもっと自信を持つといい。

さらに言えば、そういう「文化国家日本」を国是として積極的に世界に向かって売り出していくべきと思う。高品質国家日本をアピールする努力を通じて、国際社会における日本のイメージと信用を高めることができる。

だがなぜか、それが十分には実行されていない。一つには、最近の日本の内

わが国は明治以来、富国強兵をモットーに近代国家の建設にいそしんでいた。その過程で経済や政治に力点が置かれ、文化がないがしろにされてきたことは否めない。

その気風は政界、官界、経済界、メディア、学界すべてに今も残っている。

海外で日本文化に接した一流の日本人ビジネスマンたちが、「初めて歌舞伎や文楽を見た。日本にもこんな素晴らしい文化があったのか」と語るのを聞いて悲しく思ったことが一度ならずある。

だから文化の海外への展開という仕事も、どうしても後回しにされてしまう。必要に迫られて、あるいはよんどころなく、ということになる。

文化交流を実施する機関として、国際交流基金が1972年に設立された理由も、当時、沖縄返還や通商問題をめぐってギクシャクしていた日米関係を修復するためと、経済・安全保障面

での国際社会の偏った対日認識の是正が大きな目的であった。設立そのものに画期的意義があった点は間違いないが、いわば受け身の対応という側面が強かったことも否めない。そういう状況は、今もあまり変わっていない。文化交流への資源配分はまだ不十分だ。

しかし、日本が逡巡^{しんじゆん}しているうちに、ここ数年、中国や韓国が極めて積極的な文化外交を繰り返してきている。K-POPや韓国ドラマの浸透、あるいは中国語を広める孔子学院の世界的拡大は大きく耳目を集めている。だからといって、それに対応・対抗するためというのでは、今までと同じだ。世界に冠たる日本の文化を、自信を持って、自らの戦略に基づいて展開していくべきであろう。

今年に入って、政府が成長戦略の一環として、コンテンツ産業の海外進出を後押しするため、思い切った予算を

投入して新機軸を打ち出しているのは歓迎すべきことだ。望むらくは、文化産業の振興というビジネスの視点に加えて、外交的観点から、対外文化交流にも思い切った力を注ぐことが、日本の国益に資すると考える。

その際、熟慮すべきは文化交流の形と内容である。日本の文化を外国に向けて広めるのも引き続き重要だが、世界ではグローバルゼーションの進化とともに、交流の双方向化あるいは共同創造というプロセスが加速化している。自国の文化を紹介するとともに、相手国の文化紹介にも協力する。あるいは先方の文化発展のために自分たちのノウハウを提供する。さらには一歩進めて、彼我一体となってそれぞれの特色を生かしつつ、新たな文化・価値を創造する。そういう交流がますます重要性を増すであろう。そのための取り組みを強化したい。